

北原淳編

『東南アジアの社会学』（世界思想社）

一九八九年 四六判 三〇八頁

はじめにお断りしておくべきことと思うが、小生は東南アジア研究の専門家ではなく、この数年ほど年に一度くらいの頻度で東南アジア旅行を楽しんでいる人間にすぎない（旅行の名目は、定期市の比較ということになっている）。行き先はだいたいのインドネシアである。編集委員会には、この旅行のことが伝わったのだろうと推測するが、東南アジア研究の専門知識を小生が既にある程度蓄積していると、編集委員会が勘違いされたのではないことを、切に祈るばかりである。

話はとぶが、社会学の研究・教育を職業とする者の一人として、小生は時々夢見ることがある。一人の研究者あるいは一群の研究者仲間がフォローする社会学の間口の中に、一般理論・日本の社会から素材をとった研究・異文化社会から素材をとった研究、という三つのヴァリエティをもちこめるようにならないだろうか、という夢である。（社会学が将来の世代に対してもつ可能性の原点の一つは、この地球上には、一つの社会ではなくて複数の多様な社会が併存しているとい

う事実ではないか、と考えることがあるが、その考えがこの欲ばりな夢に影響しているのかもしれない。）

このヴァリエティの三番目の項（異文化社会からの素材）に、小生の場合には東南アジア研究をもつてこれたら、というのがこの夢の続きなのであるが、これがいうは易くおこなうは難しの見本のようで、東南アジア研究に新規参入するのはむずかしそうだぞ、という認識を得た地点で足踏みしているのが小生の現状である。このような地点から、本書についての感想を述べさせていただくことをお許し願いたい。

—

本書を俯瞰した場合の編集上の特徴は、次の二点であろう。

(1) 平易な解説をめざした（たとえば大学生や小・中・高の先生を読者と想定する）教科書・参考書あるいは入門書としてつくられていること。

(2) フィリピン・インドネシア・タイという地域別の構成と、「家族・親族」「農村社会」「都市化・都市社会」という項目別の構成とを交差させることによって、全体として均整のとれた論述にまとめられていること。

まず第一の特徴について。

社会学の一領域としての（また学際的研究の一領域としても）東南アジア研究が、近年知的生産性の高い領域の一つとなりつつあることは、門外漢の目からみてもわかる。しかし、

この領域は魅力的ではあるものの、基礎的な社会学の勉強の他に、言葉の習得、現地での生活経験・調査経験、そのための費用と時間の調達、また研究者ネットワークとの接触など、研究の入口に到達するまでに乗り越えなければならぬハードルは、相対的にみて数が多いように思われる。このような印象をもっていたので、東南アジア地域に関する社会学の成果を、初学者向けにまとめるという本書の試みは、時宜をえたものであり、歓迎すべきことと評価したい。

初学者あるいは入門者といっても、いくつかのタイプに分けられるだろう。たとえば、①社会学の基礎的な素養、②東南アジア地域に関する何らかの経験と知識、などの有無によって。小生の見当では、本書は、東南アジアに関するある程度の「土地勘」を既にもっているタイプの入門者に推薦できるような性格の入門書である。

同人の皆様にも御経験のあることと思うが、外国のどこかの地域を舞台にする論文を読もうとすると、その地域の近くを旅行したことがあったり、引用されている土地の言葉の発音におぼろげながらもなじみがあれば（一言でいって「土地勘」があれば）、一応読み通せるものだが、その「土地勘」がなければ、随分と四苦八苦するものである。カタカナ書きの言葉が、地名なのか人名なのか、はたまた普通名詞なのか、その区別すら記憶できなくなることもある。（本書の場合には、「土地勘」のない入門者でもこの最悪の状況に陥ること

はまずない。その点の配慮は行き届いている。）

小生は教養部に長く在籍してきたので、その立場からいうことになるが、たとえばもし本書を読もうとする教養部生がいるとすれば、そのまえに東南アジアのどこかに旅行しておいで、まず現地を踏んでから本書を手にとるのが、平易に書かれたものをわかりやすく読むコツだよ、とアドヴァイスしたくなるだろう。こんなことを言えないものねだりになるが、本書のような「入門書」と、「旅行案内書」との間の中間的な参考書がほしいという気もする。しかし、本書のように、土地勘のない人へのサーヴィスに過度にかまけることなく、「固有の社会学の領域の基礎的な事実関係とそれについての研究状況の平易な解説」（はしがき、ii頁）に徹するのも、見識ある一つの態度というべきである。

また、土地勘のない入門者への参考書は可能かどうかという問題は別として、ほかにたとえば、比較的若手の執筆者の一人に、言葉をどの程度習得するのにどの程度の時間を要したとか、本文中に引用されている第一次的データを現地で収集するのにどのくらいの時間また経費がかかったかなど、前に述べた各種の「ハードル」について、具体的に書いていただくような欄があってもよかったように思う。

第二の特徴について。本書の部・章の構成は、次の通りである（節ごとのタイトルは省略する）。

I 総説

一 東南アジア社会の特徴

二 東南アジアの家族・親族

三 東南アジアの農村社会とその変化

四 東南アジアの都市化と都市社会

II フィリピン

一 フィリピンの家族・親族

二 フィリピンの農村社会

三 フィリピンの都市化・都市社会

III インドネシア

IV タイ

(第Ⅲ・Ⅳ部の章立て及びそのタイトルのつけかたは、第Ⅱ部と同じである。)

執筆者は計11人である。地域研究の書物が何人かの執筆者の共同によって著される場合、異なった専攻分野の人々が学際的に協力するケースと、類似の専攻分野の人々が集まって分担しあうケースとがある。本書は、相対的にいってほぼ後者のケースに相当する。地域研究の協力体制の組み方について、出身専攻分野があまり重ならないように学際的にメンバーを揃える方がベターである、という意見もあろう。この点は編者のご意見も伺いたい。巻末の執筆者紹介によれば、各執筆者の所属機関は全国的にかなり散らばっている。執筆者グループのネットワークの維持にもかなり御苦労がおりだろう。

「家族・親族」「農村」「都市」という項目を、「I総説」以下四つの各部で判を揃えたように繰り返すという構成は、どちらかというと *ethnographic* なアプローチ(項目を揃えた比較社会論的視点)への途をひらくやり方といえよう。このゆき方は、「固有の社会学的領域」にこだわるのであれば、当然であるしまた適切なものである。しかし、いわば枠を踏み外さないというこの行き方は、反面、単調さを生むことにつながりかねないので、本書の骨格をきめる際にはかなり勇気が要ったのではないかと拝察される。ややもすると *ethnic* な(一つの文化社会における各領域間の独自な連関を尊重する)方向がより本格的であるという偏見(異業種分野への新規参入を考慮する時には一つの壁となる)にとらわれてしまう小学生などは、有給休暇を年に一度まとめて使うぐらいでは、異文化社会研究に手を染めることなどとても及ぶもつかないこととヤケを起こしがちである。しかし、*ethnographic* な方向も同様にありうるという(本書の構成から読みとれる)主張は、現在のフィールド以外の地域にも足をのばしてみようかという気のある同学諸兄姉の耳には、心強くかつまた新鮮に響くだろう。

もっとも、(土地勘のあまりないような)読者の立場で考えてみれば、枠を踏み外すヴァラエティがもう少しあったら、各地域ごとの印象がもっと差別化されたかもしれないという気はする。同一の章構成になっている各部を続けて読んでい

くと、どうしても話題に重複する部分がでてくるし、似たりよったりという印象が相対的に強くなってしまふようだ。たとえば、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの各部に、他部とは共通しない章をそれぞれ一つずつ置いて、(できれば社会学とは別枠で)何か特色あるテーマを付け足すというやり方もあったかもしれない。しかし、このことは執筆者グループの顔ぶれの組み方にも関連することである。専攻ディシプリンの類似性が高ければ高いほど、枠がそろってしまふのはやむをえないことだ。

二

以下、各章ごとに短い感想を書かせていただく。「総説」については後でふれることにして、第Ⅱ部からはじめたい。

「フィリピンの家族・親族——菊地京子」菊地はフィリピンの親族の基調を双系制ととらえつつ、単系制社会は集団志向型の社会であり双系制社会は個人志向型の社会であると一般化し、さらに「(前者が)帰属主義的・血統主義的傾向にあるとすれば、後者は業績主義的・能力主義的志向の強い社会といえる」(87頁)と大胆な仮説を提示している。この仮説のために、イフガオ族の例、家族・親族の絆が個人間の「関係設定を基盤としている」こと、「女性の社会進出を阻止する要因が少ない」ことなどを例証としている。この仮説は興味深いものであるが、後続のインドネシアまたタイの家族・親族の担当者たちは、この仮説に言及していない。

四つの部のそれぞれで、家族・親族を担当する四人の執筆者たちが共通して出発点としているのは、「出自集団」(リネージとクラン)と「キンドレッド」の区別である。グッドイナフ(一九六二)への引用注つきで、前者は「祖先中心的な親族の組織化」として、また後者は「個人中心的な親族の組織化(おそらく組織化というよりもネットワーク資源の範囲とでもいう方がわかりやすいと小生は思う)」として解釈され、「双系制」は後者のキンドレッドと等置されている。この用語法はこのグループに共有されているので、使う度にくわしく説明する(読者はそういう説明に出会うと、前の説明とは異なった見解が示されるのかと身構えるので疲れる)必要はなかったらう。双系制を説明するのに、「擬似単系」「二者択一的単系」などの専門的用語が十分な説明なしで引用されている箇所があるが(77、78、16、17頁)、知識のない読者(本書の想定している読者)に対して不親切である。

菊地・インドネシアの黒柳、タイの竹内の三人ともに、キンドレッドを中心に描きながら、それ以外の単系あるいは非単系の出自集団の萌芽ないし傾向をもあわせて指摘している。なお、83頁に「祖父母を共有する第二イトコ」「曾父母を共有する第三イトコ」とあるが、イトコの数え方については、一五八頁以下の用語法の方が一般的であろう。

「フィリピンの農村——永野善子」社会経済史学専攻の永野は、先スペイン期の「バランガイ社会」から、植民地期の

アシエンタの大土地所有・華人系メスティーソによる分散的土地所有を経て、「緑の革命」以後の土地なし労働者層の増大・商業エリートの手頭まで、土地の利用あるいは所有関係を中心として、農村社会のおおづかみな歴史的状況を短いスペースの中で要領よくまとめている。

ただ、「バランガイ社会」を説明するために、カチン族の研究の中でリーチが提出した「グムサ」「グムラオ」の概念を引用している箇所では、両概念が前面に出すぎて、「バランガイ社会」の影がうすくなっている。フィリピンの話とカチンの話を区別しにくくなる読者の中にはいることだろう。

〔フィリピンの都市——津田守〕津田は、マニラにおける過剰人口・スラム・スクォッター地区などの問題を前置きとして、16C後半以降のマニラという都市が首位都市化するに至る歴史を俯瞰している。第Ⅲ・Ⅳ部の都市を担当している他の二人の執筆者と比較すると、「首位都市」への言及は共通しているが、（たとえばインフォーマル・セクターなどの）都市の内部構造には立ち入っていないので、物足りない感じがしないでもない。（このように読者が、対応する各パートを比較して、物足りなさを感じたりあるいは類似性を過度に感じてしまうのは、一で指摘した本書の構成上の特徴から避けられないことであろう。）

マカティという都市の一財閥独自の都市計画について短い言及があるが（二三二頁）、マルコスやアキノの消息をもれ

きいている読者の中には興味をそられる人もいるだろうから、できればこの点についてもっと書いてほしいと思った。

〔インドネシアの家族・親族——黒柳晴夫〕黒柳は、ジャワ社会を中心に記述し、「祖先中心的な観念が希薄」であり、「タテの親子関係がことさらに優先されなければならない関係として立ち現れるようなことはなく、むしろ日本の社会よりもヨコのキョウダイやイトコの関係も強く意識されている」（一四九頁）ことなどから、双系的な社会と性格づけている。婚姻・居住制・相続と扶養、というふうには、一連の項目（第Ⅳ部の担当者もこれらの項目を踏襲している）がわかりやすく説明されている。黒柳はとくに離婚について小項目を立てている（この小項目は、第Ⅱ・Ⅲ部の対応する章には含まれていない）。離婚率の相対的な高さ（インドネシアの数値のみが婚姻一〇〇に対する離婚件数であげられているので、読者は比較の手掛かりをつかみにくい）を指摘した後、「離婚が容易に行われてきたのは、ジャワの家族や親族が、離婚に伴って生ずる事態を病理現象として発現させないための構造的原理を備えているからだ」（一五六頁）と説明している。双系的な社会という論点から入って右のような説明でしめるやり方は、短いながらも起承転結のクリアーな構成である。

なお、黒柳は loose structure という原語に「柔構造」という訳語をあてて、「ルースな」ということときカタカナ訳語を慎重に避けているが、同感である。

「インドネシアの農村——柄澤行雄」「貧困の共有」「農業のインヴェンション」に代表されるギアツの仕事を充分に活用しつつ、ジャワの農村社会を記述している。ギアツの諸概念のほか、ブーケの「二重経済論」、人口、土地制度の歴史、小作、分配制度、アリサン（無尽講）、ゴトン・ロヨン（相互扶助）、階層なども手際よく説明され、近年の行政による上からの住民の再組織化の動向にも言及がある。

なお、「イスラム教の断食明け（一月）」（二七八頁）は（イスラム暦の十月）とした方が、誤解がないだろう。

「インドネシアの都市——今野裕昭」首位都市という論点に続いて（都市人口率はインドネシアの一九八〇年が22%、タイの同年が17%と掲載されているが、インドネシアの数値の方が低いと記述しているかのように受け取れる箇所がある。一九六頁）、農村から都市への人口移動、インフォーマル・セクター、都市カンボン、中間層、階層構成などが論じられている。力点は、都市社会の内部構造、流動性、移動と定着といった側面におかれている。執筆者たちの調査・パバネックの調査・クラウセの調査などの成果も豊富に引用され、充実した内容となっている。

総じて、右の三つの章からなるこの第三部（インドネシア）は、むりな論理構成への拘泥もなく、豊かな材料がコンパクトにまとめられていて、粒がそろっているという印象を受けた。執筆者達の力量もさることながら、ジャワについての研

究蓄積の水準が相対的に高いという一般的な背景も影響しているのだろう。

「タイの家族・親族——竹内隆夫」竹内がもっとも力を注いでいるのは、「屋敷地共住集団」についてである。竹内の結論は、「内部に核家族や直系家族を包含する屋敷地共住集団をもってタイ家族の範型としたい。形態分類すれば、それは、合同家族にあたる」というものである。これを一つの見方と認めるにしても、ここに至るまでの議論が不必要に長い。データ面での新味は一切ないのだから、ご自分の見方をもっと単刀直入に提示した方がよかつたろう。「新たなタイの家族構成・親族構造」をえようという力みが目立つ論述は、かえって読者の方に、これはどこかに無理のある議論をしているのではないかという警戒心を起こさせてしまうだろう。

「屋敷地共住集団」を、開拓空間という状況の下での家族周期の一面面として位置付けるところまではわかるが、その局面を「家族の範型」にもちこむところまではついていない。だいたい、たんに「家族」あるいは「特色ある一類型」ではなく、「家族の範型」といわなければ気がすまないという視点は、はじめから問題をわかりにくくさせているという印象を受ける。

家族・親族の形態的分類に、ある限度を越えてくだわるよりも、むしろ、水野浩一の示唆として短く言及されているような（二三四頁）、開拓空間という生態環境・屋敷地共住集

団・（枝村なども含む）村落構造を一繋がりの論理で俯瞰できるような視点を構築する方が、実りある方向ではなかったろうか。なお、竹内は、「双系」という用語に代えて「双方」という用語を使うことを提案している。しかし、黒柳と「総説」執筆者がまれに使っているだけで、執筆者グループがこの提案に一本化しているわけではない。

〔タイの農村——竹邑尚彦〕ドンデン村の事例が中心に据えられているが、コーラート高原の開拓の歴史・開拓空間の枯渇・農産物輸出ブーム・通勤兼業・寺と得度など、話題は過不足なく多岐にわたっていて、タイについての広い見取り図を読者に与えることに成功している。短いがゆつたりとした冒頭の書き出しぶり、また、「何よりも重要な姿勢は、『人々はそれぞれ違うのだ』という単純な命題についての自覚的認識」（二六七頁）で稿をとじるところなどは、執筆者の熟練した構力が光っている。

なお、竹邑は「屋敷地共住集団」について、「一時的な結合関係と見なすのが妥当」であり、「近親間互助の一形態として捉えるのが妥当のように思われる」（二五九頁）と述べて、「総説」の執筆者および竹内の熱っぽいこだわりからはさりと身をかわしている。竹邑は、水野浩一の「二者関係の累積体」「間柄の論理」（二六〇頁）という方向での論理展開を評価しているようである。

〔タイの都市——松蘭祐子〕ここ20年間ほどのタイの経済

成長についての主要なデータが紹介された後、首位都市としてのバンコクがとりあげられ、とくにインフォーマル・セクターに焦点が当てられている。「都市の工業部門がもつ労働需要が賃金の上昇を促し、農村人口を吸引していったのが、先進諸国の人口都市化であった」（二七八頁）という理念型をとりあえずの手がかりとして、それとは大いに偏倚しているバンコクの過剰都市化が丹念に記述されている。この章の記述の枠組みは、インドネシアの都市の章と共通する部分が多いが、バンコク住民へのインタヴューが二例ほど直接話法で引用されているのは、この章独自の工夫である。

タイの農村・タイの都市の二つの章では、（その性格はやや異なるが）事例が効果的に引用されている。タイの家族の章でもその趣向がどこかで適用されていれば、第Ⅳ部の印象ももう少しまとまったものになったかもしれない。

三

〔総説——北原淳・高井康弘〕第Ⅰ部総説（本書全体の1/4を占める）の全体あるいは（第一章第三節あたり以下の）ほぼ大部分を、第Ⅳ部の後に配置した方がよかったのではないか。フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア、時にはベトナム、という広い範囲の各地域から提出されてきた諸概念を縦横に論ずるという総説の議論に、はじめからついていけない初学者は少ないだろう。総説の役割を各論部分の総括や

整理をするということに限定して、後ろに置いたほうが、各論部分の印象ももっと効果的になったろう。また、わかりにくいと感じられる議論が散見される箇所があるので、そこを読み越えて第二部までたどりつくことを初学者に要求するのは、酷というものである。

総論にはお二人の名前の署名があるが、文字通りの共同執筆なのかそれとも分担執筆なのかはわからない。読んでいる時には、総説のうちの第三章四節までとそれ以降の部分ではいくらか筆致が異なるように感じられた。そこを境として、前半を北原さん後半を高井さんが分担しあったか、あるいは少なくとも後半は高井さんお一人の執筆ではないかと推測する。前半に頻出するたとえば「文化パターン」という概念は、後半ではその姿を消している。論調にいささかの異なりがあるので、もし分担しあったのなら、そのように署名された方がよかったと思う。

さて、相当に広いある地域の社会的特質について総説することは、きわめてむずかしい仕事であると察せられる。どの地域のどのテーマについても研究成果の蓄積水準が同じになっているというわけではないのだから、東南アジア全体をひとまとめにして、かつ偏りなく総説するということはできるわけがない。従って、この種の仕事に対して読者が期待するのは、利用可能な研究成果が適切にセレクトされ、それらの諸研究に基づく限りの射程内で総説が書かれることであらう。

う。かりに相互にぶつかりあうような有力な二つの見解が提出されていたとしても、時代・地域あるいは観察者の個性の違い、などという制約を、執筆者は無視しているのではないかと思わせるほどに、論理的な整合性を求めるような深いのはむしろ必要であろう。諸見解の異質性を許さないという方向での深い追いは、読者の頭を混乱させるだけであろう。

小生にとっての最大の難所は、エンブリの loosely structured society をめぐる議論であった。ここが難所中の難所であり、ここを読み越えれば、「屋敷地共生集団」と「家族圏」説を真正面からぶつかりあわせている箇所は、たいした難所ではない。この二つの論点へのこだわりは、前半部に集中しており、後半部の執筆者には関係がない。

「ルースな構造の社会体系」の具体的な特徴は、「……日本、ベトナムのような『タイト』な社会と比べて、タイでは人々の行動を律する規範が緩やかであり、個人の行動の許容範囲が広く、行動の予測が困難であり、持続的な組織や集団がうまくいく、等の特徴」、「強固な親族集団、地縁集団、機能集団等の中間集団が極めて少ない」(10～11頁以下)とわかりやすく記述されている(以下、この記述を単に「記述」と呼ぶ)。この「記述」から出発するなら、たとえば個人の行動レヴェルでいわれている特徴を、より分析的な概念に翻訳しておくこと(たとえば「規範が緩やか」という特徴を、①規範内容の明細化の程度②複数の非両立な規範の併存③逸

脱に対するサンクシヨンの適用、などの見地から検討すること）に向かつて次のステップが進むことを期待するが、その種の議論はなされていない。

はしよっていえば、執筆者の議論の核となっている（そしてわかりにくい）用語・用語法は「文化パターン」と「次元（あるいはレベル）がちがう」という二つである。つまり、上述の「記述」の内容をそのまま「文化パターン」（「ルース」という文化パターン」、27頁）というカテゴリーの中に囲いこんでおき、このカテゴリーは、具体的に観察可能な次元（行動あるいは社会構造の次元）とは異なる次元（文化システムの次元）に存在するのであるから、かりにこの「文化パターン」が社会構造の中に具体的に発現していなくても、この「文化パターン」を仮説しておくことは、論理的に可能である、というのがその究極の論法である。（超歴史的な文化パターン」というふうに、びっくりするような形容詞が付されることもある。）「文化パターン」という用語の使い方に混乱があるのではないか。「記述」の諸特徴に対する一般的な説明力をもつような分析的諸概念が提出され、文化システムの次元に適切に位置づけられてはじめて、この「文化パターン」というような概念が意味をもつのではないか。執筆者は、そのような手続きをふむことなく、「記述」の内容の簡略記号としてのみ「文化パターン」という用語を導入しているの

で、結果的に、この概念は、「記述」の諸特徴を社会構造の

次元から文化の次元へと（同時に、記述のレベルから分析のレベルへと）移植させるさいのリフトの機能しか果たしていない。

執筆者は、具体的な観察事例によってのみ議論を決着させるというパースペクティヴはタイム・スパンを短くするきらいがあるから、もう少し長いスパンの視野を確保するために、文化システムの次元という概念を必要とすると考えているようである。つまり、あるところである観察事例が出され、またべつところでそれを否定するような観察事例が出された場合、ふたつの観察事例とともに総説に抱撰するための舞台として、「文化の次元」を利用しているように感じられる。

おそらく、執筆者の真意は次のような文章でもっともわかりやすく表現されている。「前述のようにタイ人研究者たちの厳しい批判もあった。そこで今日では『ルース』概念は新しい文献ではほとんど話題とならない。しかしもちろん『ルース』とされる事実までもが突然消えたわけではない。個人の文化・パーソナリティの次元ではそれは依然一種の底流として流れているとみるべきだろう。たとえばそれは政府の開発政策の受け皿として各種の官製組織の育成が行われているが、その組織率が極めて低いとか、参加意欲が極めて低いところにも現れている。……もっともこの『ルース』さも工場や軍隊のように人々が近代的な組織規律、職業規律に慣れてしまえば潜在化してしまい表面には出てこないようになるだろ

う。」(43頁)

この引用文では「文化パターン」「次元がちがう」などの語句が使われていないが、その分だけ、執筆者の考えがストリートに読者に伝わるだろう。

エンブリのアイデアを継承しようとする執筆者の議論のもう一つの小さな欠点は、エンブリが主に副詞的に使っていた言葉を、形容詞また時には名詞として、しかも日本語に移し替えることなく、カタカナ表記のまま使っていることである。たとえば、「ルースな構造の社会体系」「ルース概念」「ルース」という文化パターン」「ルースな村落」という具合である。「ルース」という文化パターンの意味内容がいまいちわかりにくいので、用語法が難解になるのは当然であると思うが、執筆者の用語法では、何がどのようにルースなのか、いつのまにか読者はわからなくなってしまう。

また、カタカナでルースと書かれると、日本語として時に使われることのある悪い意味がどうしてもつきまとってしまいうし、読者としても本当のところはその意味がよくわからないので、なんとかならないものだろうか。しかし、どのような日本語が適当かという問題は、「ルース」という文化パターン」という言葉で何をいおうとしているのか、もっとはっきりさせた後に決められるべきことであろう。

「屋敷地共住集団」と「家族圏」をめぐるでも、前に指摘した執筆者の論法の定型パターンがあらわれている。「前者

(家族圏) は超歴史的な文化パターンに重点を置いた見方であるのに対して、後者(屋敷地共住集団) は近親間での機能・役割、およびその規範に注目した捉え方である。両者は、その指し示す次元が違うのであるから必ずしも相互に排他的ではない」(24頁)。

東北タイからの知見とマレー農村からの知見が提示されたとき、ふたつの知見が相互に排他的であると感ずる読者は少ないのではあるまいか。東南アジアにもいろいろな家族集団のタイプがあることがわかって、なるほどとおもふ読者の方がむしろ多いのではないか。かりに、屋敷地共住集団が、家族圏的性格を基調とする社会に存在するをいおうとするなら、もっと別の言い方があるだろうと思う。

さて、上述のような執筆者固有の論法が出てくるのは、結局のところ、前に述べておいた「総説を書くことのむずかしさ」に起因しているのだろう。総説前半部の執筆者の場合には、諸説を総合しよう、より端的に言えば、執筆者がメインと考える説へのこだわりを決して手放すことなく諸説を折衷しよう、という誘惑に抗しきれない総説者の姿が浮かび上がっているように思われる。

ところで、前に引用した「記述」中の「規範が緩い」という特徴は、より一般的な分析的概念によってどのように定式化できるだろうか。行動と規範の関係について興味深い問題が示唆されていると思うので、既に指摘した諸点に加えても

う一つ思いつきを記させて頂きたい。おそらく、執筆者が指摘したい一般的な問題状況は、規範とサンクションの装置がまったく同一であっても、より「タイト」な運用の仕方と、より「ルーズ」な運用の仕方があり、この違いは、生起する行動パターンに影響するので、分析的に区別しておく必要がある、ということではないだろうか。

小生ならたとえば次のように考えたい。①「規範」とは独立に、「規範の制御力」（たとえばお目こぼしの有無）というような概念が必要である。②「規範の制御力」という概念をより具体的にどう解釈するか、いくつかの方向があるうが、ここでは一案として、実際の行動と規範との間にズレがある場合、そのズレがどのように対処されるかという問題と解釈しておきたい。③執筆者のいう「規範のゆるさ」は、たとえば、行動と規範のズレが存在しても、そのズレの事実を関与者の間で顕在化させないように、あるいはなるべく曖昧なままにしておく、というルールが設定されている、というように仮説化できないだろうか。④このルールは、規範の運用の仕方にかわる指示であるから、「規範」そのものとは区別して、たとえば「メタ規範」と呼ぶのがふさわしいだろう。以上のように分析的な概念を設定しておけば、当然のことながら、いわゆる「タイトな」社会の「メタ規範」についても議論する途があることになる。異なった社会の比較分析を行う場合、規範の内容という項目の他に、規範の制御力ある

いは規範運用に関するルールという項目を明示しておく、分析がやりやすくなるかもしれない。

小生の乏しい経験的観察（一旅行者としての、また、前任校における学部留学生を対象とする小調査からの知見）にしたがえば、エンブリのアイデアを生かしたいという執筆者の気持ちもわかるような気がする。直観的にいえば、（ある領域に関して）行為者（自己および他者）の選択範囲を一定の限度を越えて狭くすることは、窮屈だしスマートでない、というような、「タイトな」領域の優越する社会に立脚点をおいてみると、組織の効率を重視する方向ではなく、行為者のレヴェルでのいわば「美学的な」（あるいはオシャレな）方向でのアクセントがより強調されている、という特性をどこかに確保しておきたいという気はする。

エンブリのアイデア・文化パターン・次元が違う、といった執筆者の議論をフォローしようとして思わぬ方向に話がいってしまった。いずれにしてもこの問題は、小生一人の手には余るので、同人諸兄姉の助っ人をお願いしたい次第である。尚、ギアツたちのマサチューセツ工科大学のフィールド、モジョクトの実名はクディリ県・パレであることをはじめて教わった（44頁）。

与えられた紙幅を大幅に超過したこと、またそのために「総説」後半部に言及できなかったことを、編集委員会と執筆者にお詫びしたい。（みぞべ あきお・金沢大学文学部助教授）

ソシオロジ編集室から本今朝、職場に出かける直前に連絡が届いた。開けてみると、一週間以内に短文を提出されたし、という。突然に、時間をかけて練られたとみられる書評に一週間以内で何か応答せよ、というのはフェアではない。すでに締め切り期間を過ぎた他の原稿をかかえていささかピンチの私としては、お断りしたい気持もある。が、不本意ながら期間を限られた編集室のご苦勞もよくわかるので、書評の趣旨を十分に咀嚼する暇もなく、「すれちがい」を承知で若干の弁明をして、「書評に応えて」に代えさせていただきますと思う。

まず、軽率といわれたら、まさにその通りです、と答えるしかないが、偏らず全国に公平に拡散させた執筆者一同が、本書の執筆に関して一堂に集合して、編者の関心、個々の筆者の関心、とりあげる項目、等を話し合う機会がなかった。これはご理解いただきたいが、もっぱら小出版社ゆえの経費上の理由による。したがって、企画から出版にこぎつけるまで、打ち合わせはもっぱら文書の郵便連絡に限られたといっている。本書は極端にいうと、編者がテーマを限定はしたが、執筆者諸氏にはその範囲で自由に内容を展開していただいた論文集に近い。たとえば同一概念の説明の繰り返しが多いのもそのせいである。にもかかわらず内容に統一性があるとした

ら、編者を除く執筆者諸氏の力量によるところ大である。「総説」はとくにそうだが、現地感がない学部学生諸君に必ずしも「平易な内容」でなかったのは、おっしゃる通りで異論はなく、自らも反省している。以下「総説」のみにふれる。

いささか大上段に構えると、筆者の東南アジア研究の方法論の精神は、歴史主義と機能主義の統合にある。基本的にはこれは、第一には、学部時代に社会経済史（マルクスとウェーバー）の素養しかなかった筆者が、卒業して突然、機能主義の方法論を前提とした東南アジア研究の調査モノグラフと業務上付き合うことになり、悪戦苦闘しながら今日に至ったという個人的事情による。第二には、現在の東南アジアの激しい社会変動と社会の諸次元の統合状態の崩壊のもとでは、現地研究者の間でも機能主義（たとえば「近代化理論」）の權威失墜という状況がある。評者は失礼ながら、東南アジア社会の歴史的形成という筆者にとつての最大の関心事であり、農村については多少ともふれたつもりの史的变化には全く一語もふれておられない（私の別のタイ農村に関する単著をある評者は「史的地域研究」と名付けたくらいである）。しかもその農村の部分がまとまりがないことにも触れられていない。私は率直に言って、「ルース」の機能する「規範の制御力」といった評者の重視されるメカニズムの操作的モデルの探究それ自体（それが「社会学」にとって重要でないとは言わないが）にはあまり関心がない。空飛んでも知れないが、各

国の古い文献に、「妻型居住」や「焼畑耕作」等の基層文化を発見するような作業を私は、現在の野外調査とともに重視し尊重したい。現地語の史料や文献学の素養に欠け、特定時点の現地調査の範囲でのみ得られたデータから安易にモデル構築をした研究を私は正直のところあまり信用しない。我国の「社会学」が国際的に尊敬をうる道は多様であって良いと思うが、地域研究の訓練を受けた者としては単なる現地感ではなく、現地の文献学が必須であることをあらためて強調したい。「すれちがい」の第一点である。

「文化パターン」という、前者が曖昧とされる概念について、補足しておきたい。評者には文化的レベルと機能的レベルが直結する一元的に明快な社会システムが前提であるように見えるが、ことは単純ではない。東南アジアの研究史の上では、一九六〇年代末に「ルース」概念論争、七〇年代に「インポリューション」概念論争、八〇年代に「モラル経済」概念論争（これは全くウツカリ本書では無視してしまったが）があった。社会学者エバースによる第一の論争、人類学カイズによる第三の論争に関する明快な整理によれば、東南アジアの社会構造をめぐる論争の特色は、結局、意味・動機のような文化レベルと手段・目的のような機能レベルの重点の置き方をめぐる論争であり、しかも、重点の置き方により全く正反対の構造的特徴付が対立して主張される、という点にあった。それは機能的社会学が得意な個人を単位としたミクロ

な社会関係、集団というレベルと、全体社会のマクロな制度的構造のレベルとの落差という問題と交差している。さらに、歴史的な文化シンクレティズム状況にみられるように「文化」それ自体の分節的複合状況もある。これらの点は、すでに六八年の米国「アジア研究学会」のシンポジウムの議論の中で、人類学者、社会学者たちが様々な角度から問題提起したところでもある（E. D. Evans ed. 1969）。

それからの諸要素は、たとえ狭い農村のような地域社会をとっても、規範内容の明快さや逸脱へのサンクションの有無といった一元的な機能連関以上の多元的な構造をもっているように思われる。その精緻な理論化は私の手には負えないし、納得の行く議論にお目にかかったこともない。私としては、ただ理念的に、文化・パーソナリティー体系のレベルの特色はよりミクロな個人的行動に現れ、地位・役割構造のレベルの特色はよりマクロな制度的社会構造に現れる、というレベルのちがいを確認するしかない。もちろん「文化パターン」は前者の次元にかかわる。評者との「すれちがい」第二点である。分析概念になっていないと言われるれば、その通りだと答えるしかない。関心のある方は思い付きでなく過去の研究史をふまえて取り組んで欲しいと思う。なお評者はその概念の有無をもって「総説」の北原と高井の執筆分担を推定しておられるが見当ちがいである。実際は、その概念を適用する方が有効な次元と有効でない次元とを使いわけただけのこ

とである。後半でも67～68頁の都市の個人的な社会関係には同内容の概念で説明できる現象は登場する。

以上の点ともかわるが実証的な点でひとつ。評者は「屋敷地共住集団」Ⅱ東北タイ型、「家族圏」Ⅱマレー型と考えておられるようだが、ロ羽・坪内・前田著『マレー農村の研究』（一九七六年）にもある通り、前者はマレーにも存在する。前者は、故水野先生も言われたように、屋敷地への「共住」にこだわらず、生活の諸領域（とくに土地相続を核とした）における親子関係の構造的優越という事実であつても良いと思う。そのタイプにジャワ型と東北タイ型の（タイの中でも東北タイ型と中部タイ型の）類型が想定できることは、私も認めている（25～26頁）。「家族圏」とは果たしてそういうタイプを想定するようなレベルの議論がどうか。これは私も知りたいところである。私はどのような類型にせよ、「屋敷地共住集団」的構成の中でも、個別子供家族の出入りが可能な流動的ルースさを見いだせる点に「家族圏」の文化パターンが現れる、という立場をとる。

上述の事情のため、限られた時間で書かざるをえないことに、いささか不本意であり、行きすぎた表現もあるかもしれないが、評者にはご寛恕を乞う次第である。

（きたはら あつし・神戸大学文学部教授）